

## 来し方行く末

東京外国語大学大学院国際日本専攻

小美濃 彰

かつては大学院生としての生活すら想像していなかったにもかかわらず、どうしたことか現在も研究を続けることができている。それは偶然でないにしても、すべてが決然とした判断と行動の積み重ねであったわけでもなく、ありがたい縁に導かれてたどりついたというほかない。

大学院博士後期課程への進学後、郵便局でのゆうパック配達と大学での教務補佐とのかけもちで得た収入から研究費用をわずかに捻出していた私にとって、渥美奨学生として研究活動に没頭することのできた1年はきわめて貴重なものとなった。奨学金に支えられながらゆっくりと思考を広げることができたまとまりのある時間は、それ以前のような生活のなかで断片になっていた時間をいくらかき集めたとしても、代えることはできない。学部生からコツコツと積み立ててきた日本学生支援機構からの借金をさらに膨らませるわけにもいかず、あれやこれやに追われていた生活もまたべつの固有な時間であったとはいえど。

ここで細かなことを書く余裕はないが、釜ヶ崎（大阪）や山谷（東京）における日雇労働運動史に大きな影響を与えた船本洲治という革命家・思想家がいる。船本洲治は1975年6月に沖縄米軍嘉手納基地第2ゲート前での焼身決起をもって、当時の皇太子訪沖に抵抗した。半世紀近くの指名手配生活を経たのちに名乗りをあげた桐島聡が加わっていた東アジア反日武装戦線「さそり」のなかでも、帝国主義や植民地主義に対する船本の思想は共有されている。

その船本が猛烈な批判を突きけていた人物である梶大介の思想と活動を、私は研究対象にしている。船本洲治の思想が『新版 黙って野たれ死ぬな』（共和国、2018年）を通じて新しい読者を獲得していることを思えば、私の研究テーマは的を外してしまっているような気がしている。船本による梶大介批判があまりに激烈なために、一体どんな人物なのかという素朴な疑問から史料探索をはじめて抜け出せなくなってしまったのだ。かといって、なにかを後悔しているわけでもない。

梶大介には『山谷戦後史を生きて』上・下（績文堂、1977年）という、山谷に関心を寄せたことのある人々のなかでそれなりに知られた著作がある。それを手がかりに何か関連史料を見つけて読んでいけば、この人物がいつどこで何をしていたのかを知るのは、とりたてて難しいことではない。しかしながら、山谷における地域社会と日雇労働運動の歴史という枠組みのなかで何かを考えようとすると、それだけでは梶大介をうまく位置づけることができない気もしていた。

もともと梶大介は『バタヤ物語』（第二書房、1957年）を書いたバタヤ作家として知られていた人物で、その活動と存在は何らかのルートでインドにまで伝わっていたらしい。梶大介を中心とするバタヤのグ

ループがインドのビノーバ・バーベから招待をうけ、2名の仲間が渡航予定であるということを『読売新聞』（1960年7月29日付夕刊）は報じていた。さらに、梶大介はミサイル試射場建設の是非が激しく争われていた伊豆諸島の新島にも足を運んでいる。思いつくだけでも挙げていけばキリがなく、山谷における運動の前史として時系列に記述を整えただけでは何の意味もつかめないような事実がいくつも連なっている。

また、1993年11月14日に死去した梶大介が同年7月3日に遺した自筆には、釋檻樓という法名と共に「親鸞さま ありがとうございます。／山谷さま ありがとうございます。／和田先生さま ありがとうございます。／すべてのみなさま ありがとうございます。／南無阿弥陀仏」と記されている。「和田先生」とは非戦平和を訴え、かつ「闇の土蜘蛛」による東本願寺大師堂爆破事件（1977年）が意味することの追究にも努めた真宗僧侶・和田稔である。『実践・歎異抄：浄土真実身読記』（いし・かわら・つぶて舎基金／伊豆歎異抄に聞いていく会、1994年）という講述を遺した梶大介は、念仏者としても知られていた。

梶大介の人物の活動と思想を山谷だけで見ることはできないし、また山谷というかぎられた地域が一体どのような広がりをもつのかということも、丁寧に考える必要があった。そのような意味で、この1年間の研究生生活は、博士論文を仕上げていく段階でもう一度これまでの作業を見直す、絶対に不可欠な時間であったように思う。その成果として（いまだに...）鋭意執筆中の博士論文では、日本における社会運動の高揚期でもあった1960年代に、山谷という場所において無数に折り重なっていた思想の平面を一端であっても叙述できるよう試みている。

悠長に構えている場合ではないという叱咤を各方面から受けているところではあるが、この1年ほど自分自身の研究活動のなかで多くの知的刺激に溢れた密度の高い時間はこれまでになかった。一刻もはやく博士論文を書きあげなければならない立場ながら、いまに至る道のりを振り返っては感謝の念に堪えない思いである。